

東京大学リベラルアーツ・プログラム

東大×南大  
**学生共同研究**  
2016

どこにもない〈東京案内〉をつくる



東大 × 南大 学生共同研究

## どこにもない 〈東京案内〉をつくる

東京大学リベラルアーツ・プログラムでは、毎年一月に中国・南京大学から日本語上級者一〇名を迎え入れ、東大生×南大生の共同研究（問題発見型フィールドワーク）を実施しています。

今年度は今年度は「どこにもない〈東京案内〉をつくる」をテーマとしました。どこにもない〈東京案内〉とはどのようなものでしょうか。そこには何が紹介されているのでしょうか。きつとそこにはお定まりのショッピングスポットや美術館・博物館の類は載っていないでしょう。これまで誰も気がつかなかった〈視点〉の詰まった、場所／物／ヒトを紹介する〈東京案内〉です。

本冊子は、東大・南大の学生が一週間調査、議論した成果です。

二〇一六年十一月 東京大学リベラルアーツ・プログラム

# 目次

どこにもない（東京案内）をつくる

## チームA

赤羽、つながりの街	05
赤羽を見守る雑貨店	08
永遠に響く声	10
守るべき温もりと美しさ	12
赤羽に根付く駄菓子屋	14

## チームB

日本人には気づけない歴史	17
夕暮れの古本屋	20
自動車が待ってくれた！	22
塀から見る日本社会	24
表札・十軒十色	26

チーム A



久光陽太  
東京大学



李迅琦  
南京大学



王志坤  
南京大学



張楠  
南京大学



王健斐  
南京大学



崔添碩  
南京大学



吉武にな  
東京大学



三枝駿介  
東京大学



千葉湧隆  
東京大学

## 赤羽、つながりの街

赤羽の街を選んだのに、大した理由はなかった。ただ、街を歩くと、そこかしこにある、時代から取り残されたような個人商店に、妙に心を惹かれた。中に入れば店の方と気軽に話が交わせる。彼らは儲かっているのだろうか？何十年とこの場所で商売を営んできた人々にとって、この商売とは何なのだろうか？彼らにとって、赤羽はどういう場所なのだろうか？ふと単純な疑問を抱き、この街に興味を持った。

\*

一軒のおもちゃ屋さんに入って、店番をしていた高齢の奥さんのお話を伺った。「商売に頼って生きてはいけないよ。収入は年金もあるし。でもね、こんな古いおもちゃ屋さん、なかなかないでしょう。お客さんが『やめないで』というから、続けているのよねえ」

今、彼女らが商売を続けるのは、もしかしたら純粹に稼ぎのためではないのかもしれない。常連さんと、親しげにしゃべる店主。こうした光景を何度目にしたらだろうか？この時代、赤羽における商売は、ただのモノを売る／買うという行為を超えて、人と人とのつながりを媒介し、構築する、そうした営みなのかもしれない、とふと思った。

\*

赤羽の老舗でお話を伺うと、昭和20年代

に創業した店がやたらと多い。過去の資料からは、当時の赤羽の街の様相が今とだいぶ違ったことが分かる。当時の赤羽は、生き抜くための闘争の舞台だった。終戦後の混乱の時代、赤羽駅前には食料や衣料品を扱う闇市が立った。当時、人々は、生きるために、稼ぐために集まって、モノを売ったのだろう。赤羽最初の商店街は、「復興会商店街」として始まった。それから時代は移り変わり、多くが二代目、三代目となる今の店主は、赤羽の街で生まれ、赤羽の街で育った。彼らは一生を地元で生きた。生きるため、お金を儲けるために始まった商売が、次第に親子、近所…というつながりに埋め込まれていった、というのは想像に難くない。

\*

今、赤羽の街はまた、新たな時代を迎えようとしている。大型店が普及して久しい現在、個人商店の優位性は失われた。店主はみな高齢になり、稼ぎの悪い商売を引き継ぐ後継者は少ない。立地が良いから、他人に店舗を貸したほうが儲かる。過去数年でも、多くの個人商店が店をしまい、跡地はチェーン店や居酒屋に変わったようだ。生業の街から、つながりの街へ、そして次の時代へ。続く四編のレポートは、いずれも徐々に変わりゆく赤羽の街の「今」のポートレートである。

チーム A



赤羽二丁目

66

•BettyLolomaビル

67

65

64

岩淵町

ハーモニレジデンス東京

69

•コスモ薬局赤羽店

赤羽2

•ParkHomesAkabane

コーポ三晴

59

61

•渡辺ビル

•NS3ビル

55

赤羽二丁目

•イトワール

57

•エーデル

60

62

呉服屋

50

53

•アーネストホームズ赤羽

54

35

•アロー巻番館

•ARTESSIMO AQUITO

41

•赤羽庁舎

33

•山陽ビル

45

39

•城北興産ビル

赤羽SKビル

•マルキュウハイック

42

•赤羽トナミビル

36

種屋

46

43

•ITOビル

•ミザック北(支)

26

•ニュー末広ビル

•メゾン桐生

47

38

•ジュネス赤羽

30

ライオンズプラザ赤羽

•リームメンビル

22

•ガーデニア赤羽

•杉山印刷ビル

•Cerisier赤羽

25

17

19

21

25

青猫書房

赤羽駅東口 (東本通り)

18

20

23

赤羽2

27

28

愛好堂ビル

16

15

•はなまる薬局

•しらゆき薬局

24

•王子労働基準監督署

赤羽岩淵中学

雄飛堂薬局LaLa赤羽店

13

•美宝堂ビル

10

つばさ薬局赤羽二局

8

TSUTAYA

•コウノ美声堂

•赤羽調剤薬局LaLa店

赤羽岩淵中

聖母の騎士幼稚園

1

3

ダイエー

6

赤羽駅東口 (赤羽教会前)

5

アシーネ

JPT赤羽ビル

2

赤羽病院

6

ビル

西友



赤羽3

・ドミール赤羽

・ヒノデビル  
59

・綿屋染物店

57

50

・ペリエールハシダ

・宝幢院

・フロンティアビル

・第五岡田ビル

・プライデビル  
62

・フィガロ赤羽パート2

49

63

61

46

・みゆき商店

33

64

・コロナ電業

41

Ⓜスーパーホテル東京・赤羽

・シヤリエ赤羽

45

・のぐち

67

・東第1ビル

44

・第3ヒロビル

・お菓子種

65

Ⓜ三原歯科医院

・プライズ赤羽

36

・セザール赤

・綿貫ビル

・赤羽一番街ビル  
・ハートフル薬局赤羽店

Ⓜ北部セントラル病院

Ⓧ赤羽小

・ヤシマ薬局

66

・シティー赤羽

39

37

28

立赤羽台つぼみ保育園

Ⓜサンライズイン赤羽

・沼野ビル

24

赤羽1

Ⓧ赤羽駅西口 (坂下乗場)

・ミヤザワ薬局

・亀屋ビル

赤羽台保育園

Ⓜジョナサン

・富士越ビル

・宮沢薬局本部

新仲ビル

12

・ミドリビル

赤羽こども園

・八百秀

16

14

Ⓧ赤羽駅東口

マツモトキヨシ

神社

Ⓜ田口ビル

・デユ・アシ漢方薬局

8

・第二羅針盤

・赤羽西口薬局

・西口SKビル

BOOK EXPRESS

東口

・アーバンプレイス

西口

北区赤羽  
バラエティショップ・かわごえ

## 赤羽を見守る雑貨店

赤羽一番街というと、居酒屋の並ぶイメージが強いだろう。でも、外から見ると居酒屋街の代名詞的存在の赤羽は、地元の人にとっては、決してそんな存在ではない。一番街の横町に踏み入ると、不意に生活感の溢れる別の世界に入った。

スーパーマーケットが一般的になった今の東京で、個人経営の雑貨店は少なくなりつつある。ぶらぶらと散策していると、「バラエティショップ・かわごえ」という雑貨店に引き寄せられた。店の前の看板には、「五〇〇円 腕時計電池交換できます」と書いてある。懐中電灯から、いろいろなカバンまで、小さな店の中いっばいに揃っている。少しのぞくと、店主の姿は見えず、何か作業するような音が聞こえる。近づいてみると、主人の川越さんは、バリバリと腕時計の作業をしていた。

今年七十一歳になる川越さんは、赤羽の多くの店主と同じく、この土地で生まれ育った人だ。店は小さく見えるが、実は六〇年以上の歴史を誇る老舗なのだ。終戦の何十年間、赤羽は極めて賑やかだった。その頃、この場所で店を開き、腰を落ち着かせた人々は少なくない。川越さんの父もその中の一員だった。

若い頃、川越さんは秋葉原の電気街で働き、様々な技術を身につけた。昇進するにつれて川越さんは、社長から莫大な期待をかけ





られた。「社長以外では、ほとんど一番偉かったよ」と川越さんは微笑む。

しかし、一二年前、両親がなくなると、雑貨店は後継者のいない危機に陥る。社長になるか、赤羽に戻って雑貨店を引き継ぐか、川越さんは迷った。「やっぱり赤羽に戻りたかった」と、気軽に答えてくれる川越さんからは、その時どんな葛藤があったのか、私たちは想像できない。

秋葉原と赤羽。川越さんは後者を選んだ。雑貨店を引き継いだ上で、秋葉原で身につけた技術を發揮し、地元の人々に便利なサービスを提供している。五〇〇円の電池交換のようなサービスで小遣いももらい、毎晩近くの居酒屋に繰り出す。チェーン店には一度も行っていない。地元の人と話せる、温かい雰囲気が好きだからだ。最近赤羽の居酒屋が人気になってきたが、お父さん曰く、本物の赤羽の居酒屋は三軒しかないそうだ。

電気修理の評判がとてみいなので、「かわごえ」に来て修理を頼むお客が、口コミで多くなった。今や、ネットでもすごく高い評価を受けるほどの人気だ。ところが、川越さんの本意はそこにはなく、地元の人々に便利を提供するために、赤羽の老舗を守るために、その雑貨店を受け継ぐことにしたのだ。NHKまで、いろいろなメディアが取材を頼んだが、ほとんど断ったという。

「うちをアピールしないでくださいね。」川越さんは、店の中でも用意しているいくつかの椅子を指して言う。「大金はいらない。隣のおじいさんがうちに来て、たばこを吸ったり、声を掛けたりしてくれさえすれば十分だ。」そう話し、また夜の中華料理のために、腕時計の作業に没頭するのだった。



## 永遠に響く声

火曜日の午後、赤羽駅東口の商店街「Talaガーデン」を歩くと、一軒の変ったCDショップを見つけた。看板には、「ミュージック美声堂」とある。店の中、一面に並ぶCDは、大半が演歌歌手のそれである。若者には、演歌を聞く人もいるが、多いとはいえない。とりわけ、外国人の私にとって、演歌は分かりにくく、あまり聞くことはなかった。そういうこともあり、このように演歌を主に扱っている店を見て、とても珍しく感じた。

中を少しのぞいてみた。CDのほかに、今ではほとんど見ることもなくなった、カセットテープもある。壁は、演歌歌手のポスターやサインで埋めつくされている。店主は年配のご夫婦だ。ご主人は茶髪、奥さんもパーマで、二人ともお洒落である。少しお話を伺ってみた。

昭和二六年の創業で、いまのご主人が二代目だそうだ。たいへん長い歴史のある店である。この店から、昭和時代の日本社会を知ることができるような気がして、とても感心する。ずっとこの場所です赤羽を眺めてきただけあって、ご主人の言葉の端々からは、地元の人との関わりやの深さを知ることができた。CDやテープを買う人が大体常連客らしく、顧客と店主はだんだん知り合いになる。日本は人間関係を重視する社会と聞く。この店から日本の社会の隅々がわ

かるように思う。

例えば、壁にある無数の演歌歌手のポスター。聞いてみれば、すべてこの店に来たことがある人なのだそうだ。店ではよく、歌手を呼んでイベントをするらしい。お客さんは常連さんたちで、イベントの告知は店の前に出した札で行う。演歌歌手にとっては宣伝になるし、店にとっても販売促進になるので、入場料は無料。人気歌手のときは近くの施設を借りるし、そうでないときはお店を片付けて、店の中で開催する。月に一五人ほど来ることもあるそうだ。

カセットテープについても面白いお話を伺った。ご主人によると、カセットテープはCDと違って、好きな場所で自由に止められるので、カラオケの練習によいからといって、買っていく人も少なくないのだそうだ。こういうきめ細やかなニーズに応えられるのも、地元を熟知するこの店ならではのだろう。曲のチョイスもあって、お客さんはやはり高齢の方が多いという。インタビュウ中にも、常連と見える高齢のご婦人が来て、店主さんと和やかに話されていた。

東京は渋谷や、銀座などの繁華街だけではないと知った。赤羽の老舗のようなところにこそ、古き良き「日本」が残っているのかもしれない。せわしない日本の街にも、ゆっくり歩くことができるところが、親切にしゃべってくれる方もいる。商店の経営者にとって、確かに利潤は重要だろうが、もしかしたら、本当に大事なのは、お客さんと共に過ごす時の喜びなのかもしれない。



北区赤羽  
赤羽一番街の個人商店

## 守るべき温もりと美しさ

午後二時半ごろ、赤羽の一番街に到着。時間がまだ早いため町中は人が少なく、どこか寂しい感じがした。三、四人のお年寄りが道を歩いているだけで、やはり昼間は若者が少ないのだと実感した。今の一番街には飲食店や居酒屋が多くあるが、日本の美しさを代表する商店はやはり昔からの伝統的な個人商店だと思う。町中を歩いていると、非常に素晴らしい店をいくつか見かけた。

まず、まな板や台所用品がずらりと並ぶ金具屋に入った。七〇歳ぐらいの店主夫妻は笑顔で私たちを迎えた。彼らの話によると、その店は昭和二〇年に創業した老舗であり、金具を売るだけではなく刃物研ぎや鍵の取り付けもやっている。ご主人は二代目だが跡継ぎがいなく、いつ閉店するか分からない厳しい状況に直面している。友達と助け合いながら、昭和五〇年に鍵の取り付け機械を買入れ、今は鍵の取り付けを一本たったの五〇〇円でやっているそうだ。刃物研ぎは今も月に一〇〇本の実績があり、人々の生活に大いに役立っているようだ。店主によると店は数百万円相当の在庫を持っていると分かった。経営状況はかなり厳しいが、お客さんのためにずっと頑張っている。

昔の赤羽は帽子屋、靴屋、魚屋など日常生活と密着している店がたくさんあったらしい。しかしこの二、三年居酒屋が多く開業した。





最近は、不景気の影響で昼でも酒を飲んでいる若者が多いようだ。また、スーパーや飲食店も貸し店舗で営業している。昔は商店街として栄えていたが街であるが、今やその景色と雰囲気は本当に変わったようだ。

次に、古風な呉服屋を見つけた。綺麗な着物や美しい生地が数多く並ぶ店である。店主は呉服屋の歴史や商品のことについて多く語ってくれた。その店は九〇年以上の歴史があり、ずっと着物やその生地を売っている。赤羽の人々は戦後の焼け野原から賑やかな商店街を作り上げたのだ。店主によると、昔は着物を作る人や買う人が多かったが、今はレンタルする人が多いようだ。七五三や成人式、入学式、卒業式などのおめでたい時に、親が子供と一緒に着物を着てお祝いするのは変わらない。昔は呉服屋が四、五軒あったが、今は一軒しかない。昔からの常連さんが多くいて、暖かい温もりが感じられた。

金具屋にしても呉服屋にしても終戦直後に開業し、ずっと地域の人々の生活を支えてきた。地元の人と深く関わり、その地に根付いた。しかし、経営状況が厳しく今後どうなるかは分からない。伝統的な美しいものは守っていくべきだと考える。

北区赤羽  
種屋

## 赤羽に根付く駄菓子屋

赤羽一番街から居酒屋を通り過ぎて大通りに出る道に、オレンジ色の看板の駄菓子屋はあった。付近には風情あるはんこ屋や飲食店が立ち並ぶ。はじめに訪れた時は、放課後の小学生や近所に住む常連客でにぎわっていた。店主にインタビューしている間にも、幅広い年齢層の方がたばこやお菓子を求め店に足を運んでいた。

「七〇年前から赤羽で店を開いています。」店主はそう語った。もとは植物の苗を売り、生計を立てていた。しかし、太平洋戦争中の空襲により赤羽が焼け野原になってからは、駄菓子屋として再スタートしたらしい。親族で経営しており、駅前の同名の駄菓子屋も経営しているようだ。跡継ぎである店主の長男夫婦が現在切り盛りしており、実際に行ってみるとかなり繁盛していた。客層について聞いてみると、平日は近所の人たちが、土日は電車で来る人が多いらしい。なかでも、平日は放課後の小学生が多いらしい。仕入れは、昔から仕入れ問屋に頼み、今もそうしているらしい。

インタビューを進めていくうちに、一つの疑問が生じた。最近、駄菓子屋をあまり見かけなくなったが、なぜ種屋は駄菓子屋として今も繁盛しているのか。店主に聞いてみると、「ほかの店がやっていなかったお菓子の袋詰めを幼稚園などに納めているから」と答え



た。また、時期によって新しい駄菓子を仕入れているのも画期的だと感じた。さらに、店員同士で新たに仕入れた駄菓子についての情報を共有していることに驚いた。そして、店の中にテレビ番組で紹介されたことなどの説明を商品の値札の近くに置くことで、客が商品について知りやすくなるよう工夫していた。これらのことはどのように取り入れたのか。聞いてみると、「若い従業員の意見を採用した」と答えた。七〇年もの歴史を持つ店は、時代の変化に合わせて



て今までのやり方を若者の意見を用いてよりよくしていくことで生き残っていったのだなと思った。

最後に、赤羽についてどう思うか聞いてみた。店主にとって、赤羽は、「温かい街」と答えた。意味を尋ねると、人間関係が豊かで、近所付き合いがあるとのことだった。近年、都会で近所の人と話したことがない人が増える中で、かつての日本を象徴している生活が赤羽の町で実現していることをうらやましく思った。

今回の取材を通して、店主は戦前から赤羽で商売をしていることから強い愛着があることが分かった。自分の代で駄菓子屋をつぶさないように、若者の意見を採用し、ほかの店にない独自性を持っていくことに驚いた。高齢者が多い街のイメージが少し変わった気がした。

# チーム B



出口文哲  
東京大学



皇甫諺帝  
南京大学



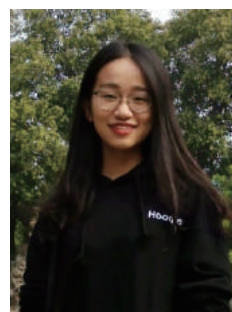
呂日陶  
南京大学



鄧清晨  
南京大学



梁修禎  
南京大学



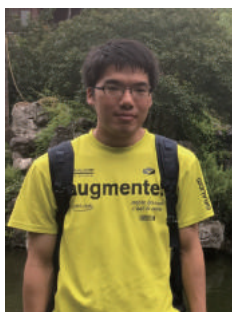
張蓓  
南京大学



土屋里緒  
東京大学



長谷川太河  
東京大学



長村洋昂  
東京大学



三谷怜司  
東京大学



## 日本人には気づけない歴史

東京を観光する際、浅草、渋谷、新宿、銀座など多くのガイドブックに載っている場所で観光やショッピングをしていませんか？

そのような東京観光も良いですが、思い出に残る場面とは意外と定番の場所ではなく、ちょっとした些細な場所にあると思いませんか？

そこで本誌では違う点に着目しようと思います。それは「日本人には気づけない歴史」です。

日本は明治維新から二つの世界大戦を経てそして高度経済成長期と、とても大きな変化を遂げてきました。これは知識としては知っています。

しかしこれを日本人は肌身に感じられているのでしょうか？また外国人の観光客も日本の歴史を肌身に感じられるような東京観光ができているのでしょうか？有名な観光地を廻っても、実際は日本の歴史など、現実味がない遠い存在のように感じられませんか？

そんな中、日本にとっても近い一方、日本とは、特に近代以降かなり異なる歴史を歩み文化が大きく異なる、中国人たちの視点で東京を見直す機会に我々はめぐり合うことができました。そんな中国人だからこそ気づけた日本の隠された歴史に着目しようと思います。そこで読者は日本人の近代化に燃える想い、仲間、家族への想いに出会うことができるで

しょう。本誌を読む読者とともに、日本の真髓を考えていきたいので、個別の調査対象は比較的客観的に記述されています。

神保町の古本屋には、明治維新後の列強に追いつこうとする日本の学問に対する熱い思い、東京発祥の表札には、関東大震災で離れ離れになった家族、友達に自分の安否を伝えようとした熱い思い、東京の自動車マナーには高度経済成長期の、復興して世界に再度認められたいという日本人の熱い思い、など、東京の些細な情景にはこれらの思いが秘められているのではないのでしょうか？

読者のみなさんもこの東京案内を読んで日本の歴史とその時々日本人の気持ちに想いを馳せてみてください。そして是非、東京観光で真の思い出なるものを作ってみてください。

海大学付属望星高等学校

文  
东海大学

ンダイコーヒーサンドイッチ



富谷

チーム B

2  
渋谷区

場キャンパス

渋谷区立松濤中学校

文  
博物館

文  
驹场博物館

駒場東大前

Central医院松涛

ガレットリ

Central医院

文  
松涛美术馆

菱田屋



まいばすけっと

Central医院分院

神泉

学校

423

317

文  
東京都立駒場高等学校

涩谷粉色酒店(只限女性)



沢

東

千里眼

文 松蔭中学校

420

東京都現代文学博物館

驹场公园

駒場

と  
地ノ上

日本民艺馆

京王井之头线

文 東京都立国際高等学校

1  
世田谷区

日本工业大学驹场高等

文 富士中学校

驹场野公园

文 驹场学园高等学校

警察署淡島通交番

筑波大学附属驹场中学校・高等学校



千代田区神田神保町  
高山本店

## 夕暮れの古本屋

調査エリアをみんなと同じ渋谷にしようと思いい、午後二時頃から渋谷を四時間歩き回ったが、気になるのは喫煙所しかなかった。いろいろ考えた結果、やはり神保町のほうがいいと思いい、そこに向かった。

神保町に着いたときはちょうど本屋の閉店の時間帯であった。店主がもう帰ってしまったという店もあり、閉店の片づけなどで忙しい店も多く、何回もインタビューのお願いを断られた。せっかく神保町に来たのに、インタビューを一件も引き受けてもらえないかもしれないという焦りに駆られながらも、高山本店という小さな書店が目に入り、もう一度試してみようという気持ちで中に入った。店の中には、白髪の老夫婦がいた。おじいさんは電話中で、おばあさんに古書店についてインタビューしたいと言ってみた。「話長くなるよ」と言い、意外にもすぐ承諾してくれた。それが閉店の三分前のことだった。

店のなかのクラシックミュージックの流れにのって、おじいさんは話を始めた。神保町で開店したのは明治一五年で、一三〇年ぐらい経つという。この町の本屋は大体明治一五年から二〇年前後にできたものである。明治の時代、多くの大学が成立し、当時の学生たちはここで本を用意するなどしていた。それゆえ、書店街と出版社などが神保町に集まったのだ。



書店はそれぞれ専門があり、今回取材した高山本店は日本音楽、武道とお料理の本が専門だそうだ。原則として、お客さんが売った本と市場でおじいさんが買ってきた本がこの本屋に集まっている。

高山本店は最初、九州でスタートし、初代の店主は弓の修理をしていた。明治時代に入り、だれも弓を使わなくなったので、商売をすることにした。当時明治の政府は教育を重視し、戦う代わりにみんな勉強しろと宣伝していたので、大学もたくさん作られ、本屋が必要になったのである。大学の多くある地域で商売しようと思いい、初代店主が子どもを連れて上京し、今の神保町で開業した。その子どもが二代目の店主になった。このように代々続いて、今は四代目が経営している。

今の時代、スマートフォンなどでも資料や本などを読むことができるようになったので、本屋の経営はだんだん厳しくなっている。その一方で、ただ単に情報が欲しいのではなく、本の実物を持っていたいという人たちも一定数おり、そうした人たちにとって本屋はなくてはならない存在である。有名な作家が書いた手紙なども古書に属するが、自分の好きな作家が書いたものを実際に手にするというのは、スマートフォンではなかなか感じられない幸せであろうとおじいさんは言った。

インタビューを終えると、おじいさんはまたビジネス上の電話で忙しくなり始めた。



東京都  
東京の横断歩道

## 自動車 waited してくれた！

月曜日の夜、私は一人で渋谷に夜景を見に行った。ある「字路を渡ろうとしたときに、私の右手の方向から自動車がやってきた。私はつい横断歩道から小走りで元のところに戻った。しかし、私が思ってもみなかったことが起きた。その自動車は横断歩道の手前に止まり、そして運転手が私を見つめていたのである。二秒から三秒、運転手と私は互いに見つめ合った。私はその間、自動車の通過を待っていた。運転手が私に手を振って、私を先に行かせた。私は会釈して渡った。

街を歩いている間に、このような「歩行者優先」の例は何回もあった。中国では、「自動車優先」である。たとえ歩行者用信号が青であったとしても、自動車優先である。「お前らだけ」とばかりに、自動車は全速力を上げて目の前を通りすぎる。このような光景を、私はこれまで何度も見てきた。横断歩道を渡っていて自動車が待ってくれたのは、この月曜日の夜が初めてである。

中国では、歩行者が自動車を避けるのは常識である。しかし日本では、他人に思いやりの心を持ち、他人の立場に立つてものを考えるのが常識だ。日本では歩行者は、自動車に乗る人より立場が弱い。それ故に、歩行者を先に行かせる。一方中国では、自動車を待つ人が増えても人々の気持ちの中では依然として、自動車に乗る人、特に高級車に乗る人をお金持ちあるいは権力を持つ人などと考え、彼



らに対し遠慮しがちである。自動車に乗る人も自分が歩行者よりもっとお金や権力を持っているので、事故を起こしても損をするのは自分ではないと考えている。それゆえ運転も乱暴になりがちだ。このような状況の下、歩行者は乱暴な運転に直面する度、自己の安全を守るために避けるから自然と「自動車優先」になる。これは、日本人と中国人のものの考え方（発想）の違いからきたことだと私は思う。

このほか、例えば、町で走る自動車がロービームで運転することや、クラクションを鳴らさないことなども中国の状況と違うので、私はそれらも気になる。私の考えでは、おそらくこれらのことも日本人と中国人の発想の違いから生じたことである。

日本に来たのは今回が初めてで、東京についてはまだまだ知らないことも多い。今後もより一層深く日本を体験したいと思う。



目黒区駒場  
駒場キャンパス周辺

## 塀から見る日本社会

東京大学駒場キャンパスの周辺は、一戸建てが数多く立ち並ぶ住宅街である。どの家も立派な外観をしているが、強い違和感を覚えることがある。それは、住宅の家の前にほとんど全く塀がないか、あったとしても非常に低いことだ。家の中には人がいないにも関わらず、車がそのまま塀のない駐車場に停まり、階段が直接に路地に結ぶ。たとえば塀があったとしても、一・五メートル以下の非常に低いものばかりである。駒場キャンパス周辺の住宅一〇二棟を調査したところ、塀の一切ない家が三六棟もあり、塀のある五二棟もほとんどが塀の高さが一・五メートル以下で、一・五メートル以上の塀を持つ家は一四棟に過ぎなかった。一・五メートル以下の塀が防犯の役に立つとは思えず、私には八五%の家が窃盗に遭うという危険に晒されているように思われる。

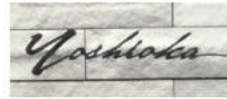
このような防犯体制では、窃盗事件は多いのではないだろうかと驚いた。中国人の一戸建て住宅では、高い塀を作りさらに電流の通じる鉄条網を設置することもよくあるからである。中国人のイメージでは、塀というものは高ければ高いほど泥棒が侵入しにくくなる。加えて日本では、塀がないだけでなく防犯カメラさえつけられない家も多い。防犯カメラを設置している家は全体の二割にも満たない。これ、中国人にとっては理解し難いことである。



日本人によると、家の塀が低いことには幾つもの理由があるようだ。まず何よりも、日本人が東京の治安に強い自信を持っていることが大きい。治安が良いからこそ、塀が低くてもものを盗まれない、家と車は大丈夫だと信じているようだ。加えて、セキュリティーサービスを導入することで安全を確保していることも挙げられる。これにより「もし無理やりに家の中へ入ったら、五分間のうちに捕まるぞ」というメッセージを伝えられるのだ。今日の日本では、塀の防犯上の意味は薄れ、塀は専ら住宅の境界を示すために作られるそうだ。高くもない塀を通して、きちんと家の境というものを表明し、塀の内は我が家の領域だと、外の人に伝えるのである。

塀の有無は、まさに日本と中国の治安の違いを端的に表しているように思える。日本の塀の低さは、安全意識の薄さや油断を表しているのではなく、非常に治安が良いために安心し切って暮らしているのである。一方、中国人は自分の周りが安全であるかどうかに疑いを抱いているため、様々な手段でできるだけ家の安全を守りたいのかもしれない。私の友人の日本人の長村さんは家へ帰るのに1時間かかるそうだが、深夜1時に一人でブラブラ終電に乗りに行く、という話も聞いた。日本の治安のよさにはつくづく感心させられる。





世田谷区・渋谷区  
種屋

## 表札・十軒十色

**背景** 大正一二（一九二三）年、関東大震災がきっかけになり、表札の文化は全国に広がった。人々は、行方不明になった家族の消息を尋ねたり、自分の無事を知らせたりするために、表札を掲げるようになった。

名前を渡すための重要な媒介、お客さんが最初に通る家の顔とも言える。身分と幸運の象徴としての表札について調べたいと思い、幾つかの家の写真を撮った。

**総調査数** 四一（世田谷区・三一、渋谷区・一〇）

**材料** プラスチック、大理石、木製、金属、紙のものもある（珍しいが）。

**位置** 家によって異なる、大抵塀の上とドアの隣の二種類に分かれる。細別すると大体五つになる。表札をメールボックスの上でつけている家もある。

**形** 長方形が主流だと言えるが、オーバルのものもある。更に、表

札の板がなく、文字が直接壁につけられているものもある。空間的感な制限から離れているせいか、自由の雰囲気を感じられる。

**言語** 日本語の名前、英語の名前、日本語と英語の名前の三種類を見つけた（日本語三〇、ローマ字五、日本語とローマ字六）。やはり漢字で書かれた表札の方が一般的だ。ちなみに、ローマ字による表札は渋谷区の住宅街の方が多かった。高級住宅街であるからかと推測している。

**インタビュー** 世田谷区に住む岡田有弘さんから、彼の家の表札についての話を聞くことができた。彼の家の表札は縦書きの長方形で、漢字で「岡田有弘」と右に彫られている。有弘さんは駒場で生まれ育ち、いま彼の名前がかかっているところには、かつては木でできた彼のお父さんの名前がかかっていた。岡田さんは四〇年ほど前、お父さんが他界する前に、岡田家の表札を受け継ぐべく、自分の表札をフィリピンのマニラで作ってもらった。自分で毛筆で名前を書き、それをそのまま彫ってもらったという。

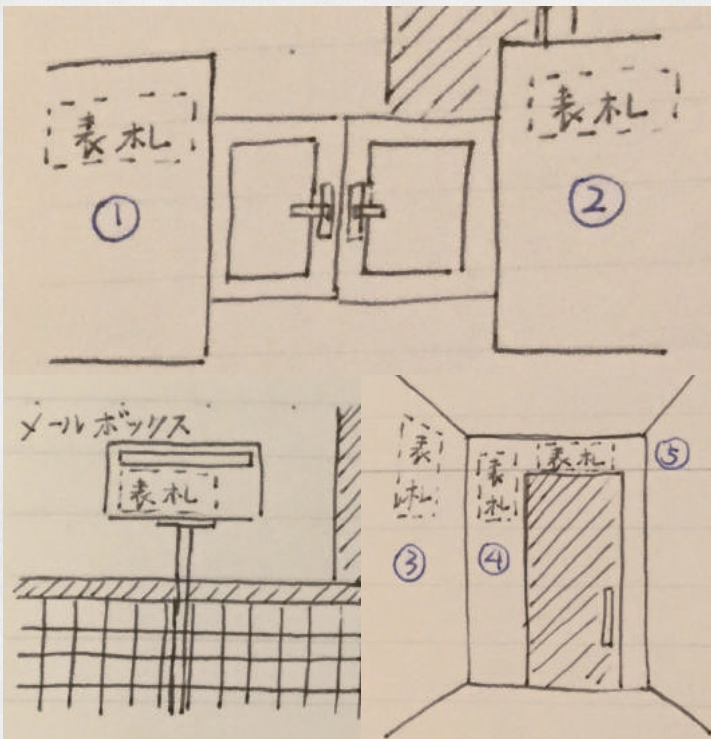
岡田家が駒場に居を定めておよそ九〇年。表札にも時代の変化がある。岡田さんは奥さんと二人暮らしだが、表札には岡田さんの名前しかない。これが今三〇代くらいの世代になると、夫婦両方の名前を掲げる人が多くなる。丸い形の表札やローマ字の表札は最近の流行りで、昔はなかったそうだ。

誰でも表札には思い入れがあるんじゃないかと彼は言う。中には、お寺で表札を作ってもらう人もいたのだとか。

家族の歴史や町並みの歴史、そして住む人の思いが、表札には詰

まっているのかもしれない。

**結論** 材料、形、位置などから見ると、表札はそれを掲げる人によって様々である。名字だけでなく、住む人の性格、好み、時には職業も示している。暮らしの気配、そして日本人の細かいところへの関心を深く感じた。



## 東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP) とは

東京大学リベラルアーツ・プログラムでは、東京大学がこれまで蓄積してきたリベラルアーツ教育の成果を世界に発信する目的のもと、さまざまな教育プログラムを実施しています。具体的には、東京大学と南京大学で実施する集中講義、テーマ講義の他、学生が主体的に知を生産する機会を提供する「東京大学一週間体験プログラム」(南大→東大)と「南京大学集中講義学生交流」(東大→南大)という学生交流も実施しています。

LAP のホームページ <http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp>

表紙写真："Alley" photo by mrhayata

それ以外の写真：各チーム撮影

地図：ナビタイム

東京大学リベラルアーツ・プログラム 編集発行 2016.11.11

